

大樹の礎

vol.34

2026.3.23

発行者:日本医療科学大学

Nihon Institute of Medical Science News Letter

日本医療科学大学の国際教育「未来の医療人を育てる学び」



新藤宣夫 学園長 逝去に関するお知らせ

本学(城西医療学園)創業者である 学園長新藤宣夫が2026年1月9日に逝去いたしました(満91歳)
城西高等学校教諭として1961年以来 半世紀以上にわたり 後進の育成に心血を注がれ 城西医療
学園ならびに城西学園 城西川越学園 の理事長を歴任し 2014年には本学の学長も務め 私学教育の
発展に生涯を捧げられました

これら多年にわたる功績に対し 2005年に東京都功労者表彰 2012年には旭日小綬章を拝受されま
した

本学の建学の精神である「報恩感謝」は 自分が今こうして生きていられるのは さまざまな人たちのお
かげであるという感謝の気持ちを持つことであり 心に深く刻まれております

学園長から賜りました計り知れない御恩を胸に 本学のさらなる発展に尽力していく決意でございます

今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます



国際教育が育む これからの医療人

医療人に求められるのは、専門知識や技術だけではありません。言葉や文化の違いを越えて人に寄り添う「人間力」が、これからの医療現場でますます大切になります。本学が大切にしてきた国際教育は、創立者の志を受け継ぎ、人間教育とともに発展してきました。新藤博明学長と中谷儀一郎副学長が、国際教育を通じて学生が得る学びや成長、学生一人ひとりの夢を支える本学の姿勢を語りました。変化する医療の現場を見据えながら、本学が目指す医療人像と国際教育の未来を紹介します。

国際教育の原点は「人間教育」

学長 本学の国際教育の礎は、創立者・新藤宣夫が、城西高校の校長時代に、いち早く交換留学制度を導入し、米国オレゴン州の学校との交流を始めました。その取り組みは、日本における海外留学の単位認定の制度化を加速させました。

生涯現役で教育の発展を願い続けた情熱は、今も本学の教育に息づいています。

本学は医療人を育成する中で「人間教育」を重視しています。その視点で国際教育を捉え、人としての厚みを育むことにつながると考えています。

副学長 海外研修は、参加した学生からは大変好評で、さまざまなプログラムを通して現地の人と交流した経験が、より深い学びや、医療人をを目指す強い覚悟につながっていると感じます。

本学の国際教育は年々充実しており、海外の現場に立ち、肌で感じる経験は特別で貴重なものです。卒業生の中には、海外の病院で働いている人もいます。海外で働きたいという大きな夢を描き、学生時代にしっかり準備を重ね、国内で就職して経験と技術を磨いた上で渡航しました。これは、教員が夢を見据えた現実的な準備を支えた結果です。本学には、学生の夢を支える風土が、開学当時からあると感じています。

学長 医療現場では、海外の患者様と接する機会が増えています。学生は将来、さまざまな言語や多様な考え方に寄り添うことになり。求められるのは、医療技術や知



新藤博明学長



中谷儀一郎副学長

識はもちろん、人間性です。特に大切なのは、他者を理解し、寄り添うこと。言葉を越えたコミュニケーション能力だと思います。

言葉を越え 人に寄り添う医療人

学長 大学は建学の精神がしっかりと根を張った上で、時代とともに変化していかなければなりません。様々な学生の希望に的確に応えることも、その一つです。

海外の方の前に立つと、どこか気後れしてしまうことがあるかもしれません。しかし、経験を積み、言葉や文化の壁を越えて、必ず理解し合えるようになります。そのことを肌で実感できる機会を提供したいと考えています。

例えば国際交流の分野には、海外経験が豊富な教員がいます。また、多くの教員が専門領域の枠を超え、学生の夢を支えたいという情熱を持っています。学生と教員の距離に近い点が本学の魅力だと思います。

副学長 研修後のアンケートには「迷っているなら行くべき」という声が多く寄せられます。医療人になりたい、人の役に立ちたいという夢を持っているからこそ、現地での学びがより深くなると思います。

アンケートには「言葉は分からなくても大丈夫」とも記載されており、海外研修が、学長の目指す「言葉を越えたコミュニケーション能力」を磨く機会になっていることを、学生の声が表示しています。志の高い学生たちを非常に頼もしく思います。

学長 海外の患者様が増えている一方で、医療・福祉分野で働く海外労働者の方も急激に増加しています。

こうした現状と将来を見据え、本学は留学生にも門戸を開いています。留学生にとって、日本の国家資格取得は決して平坦な道ではありません。

本学には、日本に留学し理学療法士の資格を取得した教員がいます。言語の壁があるなかで資格を取得したことは、学びの結果であり努力の象徴です。学生にはそのような姿勢を見習い、学生に学んでほしいと思います。

卒業生に聞く NIMSの国際教育

海外で働く 夢を現実に
大学時代がつくれた私のカタチ

看護学科2017年度卒
バラガン華帆

現在、米国カリフォルニア州、ロサンゼルス市の病院にて、テレメリー・ユニット（遠隔監視病棟）の看護師として働いています。海外就職を志したきっかけは、大学1年次のポートランド研修、そして2年次のポートランドへの語学留学でした。この体験を通して「将来は海外で働きたい」という強い思いを持つようになりました。

卒業後は、海外挑戦の道を開く可能性がある日本赤十字社医療センター（渋谷区）に入職し、ICU（集中治療室）勤務を希望して経験を積みました。そこには、大学院進学や災害医療など、さらなる目標を持っている同僚が8割以上もいて、その環境が私の夢を後押ししてくれました。その後、渡米。現地の看護大学へ編入して学士を取得し、現在のキャリアを築いています。

振り返れば、在学中の学びが今につながっています。選択科目では英語や国際看護論などを学び、自宅でも少しずつ英語を勉強していました。実習では、事前の準備を入念に行い、実習先では担当外の患者に対する看護処置も積極的に見学するよう心掛けました。

夢に向かって手探りで進む私にとって、大きな力になってくださったのは、海外の在任歴や職務経験がある先生方です。看護学科の開設は2012年とまだ新しく、当時はまだ海外就職を目指す卒業生がいない中、在学中から卒業後まで先生方には常に親身になって相談にのっていただきました。こうした先生方のおかげで、今があると思っています。

日本医療科学大学には、学科・専攻の枠を超えて様々なことが学べる環境があります。私も他学科の先生から英語教育を受けるなど、自分の興味のあることを積極的に学ぶことができました。もし大学時代の海外体験がなければ、確実に今の私はありません。

米国で働き始めて2年。看護師として次に何を目標するか考えるようになりました。興味のあることはたくさんありますが、自分のキャリアについて時間をかけて考えていきたいと思っています。



バラガン華帆さん（右から2人目）。米国在住。リトル・カンパニー・オブ・メアリー病院勤務

五感で学んだ米国シアトル 医療の最前線と人に触れた8日間

2025年8月20日から6泊8日の日程で、米国ワシントン州シアトルで海外研修を実施しました。この研修には、診療放射線学科、リハビリテーション学科、看護学科、臨床工学科、臨床検査学科の学生35人が参加しました。

バステリア大学では、自然医学の専門家による講義に加え、貴重な人体解剖実習に臨みました。ご献体の心臓や肺、脳、肝臓などに直接触れながら解説を受けるとい、医療を志す者として身の引き締まる経験となりました。また、ワシントン大学でのシミュレーション体験や医療機関の視察、現地の大学生との交流など、専門性を深めるプログラムが続きました。

本研修の目玉の一つであるボランティア活動では、パイクプレイス・マーケットのフードバンクに参加。現地スタッフと英語でコミュニケーションしながら、地域社会を支える活動に汗を流しました。さらに、大自然を体感するラフティングにも挑戦しました。

研修は、日米の医療の違いを学び、現地の医療スタッフや患者、ボランティアスタッフなどさまざまな人と触れ合う機会となり、学生にとって貴重な財産となりました。



フードバンクでボランティア活動



現地の大学生とも交流しました

世界とつながり 人を理解する 国際教育が育む 医療人の「共感力」

これからの医療人に求められるのは、高度な技術や知識だけではありません。言語や文化の違いなど、多様な背景を持つ人々と向き合い、痛みを分かち合える「共感力」と「広い視野」です。本学は、創立者・新藤宣夫学園長(故人)の志を受け継ぎ、国際教育を積極的に実践しています。

小学生向け英語イベント「Empowering English Camp」、医療分野を専攻する台湾の大学院生との交流、城西大学の留学生との交流授業、米国の乳がんサバイバーから「寄り添う心」を学んだオンライン交流。これらの教科書にはない「生きる力」を身に付ける取り組みを紹介します。

遊びを通して育む自信 生きた英語表現に触れる体験

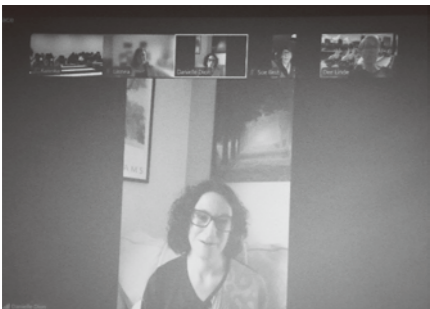
小学生向け英語イベント「Empowering English Camp」を開催しました。18回目となる今回は、近隣市町から16人が参加。ネイティブの英語講師とともに、英語でのゲームやスポーツ、初挑戦のクッキー作り、サンタからの贈り物などを楽しみました。生きた英語表現に触れ、自信を育む機会になりました。



遊びを通して学びました

乳がんサバイバーの体験談 患者に寄り添う心に気づく

看護学科の「医療英語」の授業で、米国の乳がんサバイバーで結成されたドラゴンボートチーム「ピンクフェニックス」のメンバーとオンライン交流を行いました。メンバーの力強い体験談を通じ、患者に寄り添う大切さと生きた英語を学び、将来の看護への意欲を新たにしました。



オンラインで交流しました

台湾の大学院生と共に学ぶ 医療・看護制度の違いと未来

台湾の協定校、中臺科技大学の大学院生が来学しました。各学科を巡り、最新機器の操作や身体を使った実験を体験したほか、後半のプログラムでは日本と台湾の医療制度の違いや看護体制について意見を交わしました。6年ぶりの再会を通じ、今後さらに学术交流を活性化していく予定です。



内視鏡シミュレーター体験

留学生との交流授業 異文化理解を深め広がる視野

看護学科の「国際看護論」の授業で、城西大学の留学生との交流授業を行いました。体育館でのアイスブレイクを通して打ち解けた後、グループワークでは、各国の医療事情や看護師の役割、日本の医療体制との違いなどについて意見を交換しました。臨床の現場で生かせる交流となりました。



城西大の留学生11人が参加

やりたいことに挑戦しよう 国際化する現場で生かせる視点

医療・基礎教育科 副科長
天野修司教授



学生時代にプロボクサーとして活躍していましたが、紆余曲折を経て渡米し、現在に至ります。

学生には「自分にとって貧しさは武器だった」と常に伝えています。例えば、看護師として海外で働きたいのであれば、お金がなくても大丈夫です。まずは日本で働いて資金をため、現地の大学に編入して資格取得を目指す道もあると伝えています。

やりたいことがある学生には「面白いから挑戦しよう」と声をかけ、情報を集め、目標を叶える方法を一緒に考えます。学生と一緒に考える中で、自分自身の経験が説得力となり、背中を押していると感じています。

私の専門は国際政治学です。例えば、海外のある国との政治的な関係が悪化すると「その国の人だから」とひとくりにされがちですが、国家と個人は異なる存在であり、国と国との関係は客観的かつ科学的に分析し、人と人とは互いに尊重し合って生きるべきだと考えています。

国際関係論を学ぶことは、国際化が進む医療現場で求められるコミュニケーション能力の育成にもつながります。医療従事者を目指す高校生にも、ぜひ考えてほしい視点の一つです。

情報があふれる現在、知識として海外の事を知ったように錯覚しますが、実際に肌で感じる体験とは大きく異なります。国際化する医療現場では、知識と経験の両面から人を理解することが重要です。

学生時代にこそ、やりたいことに挑戦する経験を積んでほしいと思います。本学での学びで、必ずその先も見つかります。

寄り添う心は世界共通 「人に向き合う力」育てる

看護学科
服部溪子講師



発展途上国、特に東南アジアが好きで、バックパック一つで旅をしていました。インド北部のある街で脱水症状のため倒れ、現地の人に介抱してもらった経験があり、この出来事が、現在の専門分野である国際看護学につながっています。

言葉や文化が違って、患者様に寄り添いたいという気持ちは世界共通です。そのことを、最初の授業で学生に伝えています。

医療現場では、患者様に対して英語よりも「やさしい日本語」を使う場面が増えています。難解な医療専門用語を、海外の患者様にどうすれば分かりやすく伝えられるのか。そのためのコミュニケーション力は、高齢の方や若い患者様に対しても生かせると思います。

国際看護論では、城西大学の留学生を招いた交流授業も行っています。日本語が上手な留学生でも、何気ない一言がうまく伝わらない場面があります。実は、その「言葉が通じない」経験こそが大切です。本学の学生には、そこから気づき、考えてほしいと思っています。人として向き合い、コミュニケーションできた体験は、学生の視野を確実に広げます。

これから医療従事者を目指す人、特に高校生には、ぜひ自分自身を知ってほしいと思います。私は内気で狭い世界にいる自分を変えたいと、一人旅に出ました。苦手を認め、変えようとする経験は、自分を知ることにつながります。

自分を語る医療人には、患者様もきちんと応えてくれるものですし、可能性もおのずと広がります。どうか、自分との対話を大切にしてください。

4月 新入生対象「フレッシュマンセミナー」

新入生を対象に、1泊2日のフレッシュマンセミナーを実施しました。他学科の学生や教員と交流を深め、チーム医療の重要性を学ぶとともに、大学生活への不安を解消し意欲を高める場となりました。様々なグループワークや研修を通じて、医療専門職を目指す仲間としての連帯感を養い、充実した4年間のスタートを切る貴重な機会となりました。



山梨県で実施しました

6月 第18回大樹祭の開催

第18回大樹祭を開催しました。学科紹介コーナーでは最新の医療機器体験や測定が大好評でした。ステージでは歌やダンスのバトルが熱気に包まれました。特別ゲストに柔道家の谷亮子氏を迎え、自身の経験に基づいた「柔道の極意」を語るトークショーも実施。模擬店や地域交流企画も大盛況で、学生と地域住民が一つになる有意義な2日間になりました。



熱気に包まれたステージ

8月 令和7年度子ども大学

鳩山町や毛呂山町などの小学生を対象に「子ども大学はとやま」「子ども大学にいます」の講義を行いました。テーマは「医療機器に触れてみよう」。臨床工学科の教員と学生が講師となり、普段見ることのない高度な医療機器の操作方法や専門的な手洗い方法について説明しました。体験を通じて参加者の好奇心を刺激し、医療への関心を高める機会となりました。



医療機器に触れる体験が人気

9月 地域医療視察研修

福島県いわき市で地域医療視察研修を実施しました。寄附講座の活動の一環として、いわき市医療センターや常磐病院を訪問し、地方都市が直面する医療課題や独自の取り組みを視察しました。震災伝承みらい館では東日本大震災での教訓を学び、復興への想いを込めた寄せ書きを贈呈しました。学生は、地域に根ざした視点を持つ大切さを肌で感じる研修となりました。

9月 金融経済セミナー

来春に卒業を控えた4年生を対象に、金融経済セミナーを開催しました。SMBCコンシューマーファイナンスの講師を招き、家計管理や金融トラブルの回避、給与明細の見方など、社会人として自立するために不可欠な知識を学びました。求人票の読み方や保険の仕組みといった実務的な解説に対し、学生は国家試験勉強と並行して真剣に耳を傾けていました。



社会人に必要な知識を学ぶ

11月 NIMS eスポーツ、スポーツ大会

「eスポーツ大会」と「スポーツ大会」を連続開催しました。eスポーツ大会では人気ゲームで腕を競い合い、会場は熱気に包まれました。翌週のスポーツ大会ではバレーボールを実施し、15チームが熱戦を繰り広げました。学科や学年の枠を超えた真剣勝負を通じて、学生同士の親睦を深め、キャンパスライフを充実させるイベントとなりました。



ゲームの腕を競うeスポーツ

12月 長期休暇中の学生支援(施設の開放)

年末年始に施設を開放し、学修支援及び食料支援を実施しました。食料品の配布では多くの学生が利用し、「とても助かった」との声が寄せられました。本学では学生が長期休暇中でも一人ひとりが国家試験合格に向けて集中できる環境を整えています。

アスリートの走り支える コンディショニングで地域貢献 SMCC

熊谷市で行われた関東高校駅伝大会の会場で、本学のSMCC(スポーツメディカルケアクラブ)がコンディショニングブースを設置しました。多くの選手に対し、日頃の学びを生かして全力でサポートしました。実践の場で身体のケアを行う貴重な機会になりました。今後もスポーツを通じて地域に貢献し、学生の専門性を高める活動を推進していきます。



実践の場で学びを生かす

地域に貢献 育む医療人の心 ボランティアサークル

週1~2回、スポーツ大会の運営、救護や防災訓練、清掃など様々な活動に取り組んでいます。活動は年間に約80件。学科や学年を越えて交流する中、幅広い世代と関わることで、医療従事者に不可欠な「思いやり」や「コミュニケーション能力」が自然と身につきます。興味に合わせて活動を自由に選択でき、積極的な学生には学長表彰の制度も用意されています。



マラソン大会での活動

チーム医療の精神を武器に! リーグ戦初勝利へ挑む 軟式野球部

首都大学軟式野球連盟2部に所属する軟式野球部は、2023年5月に活動を再開。経験・未経験を問わず、様々な学科の学生が集い、医療現場にも通じる「チームワーク」を大切に練習に励んでいます。24年には公式戦初勝利を上げるなど急成長中。来春のリーグ戦に向け、共に切磋琢磨する選手とマネージャーを募集しています。



チームワークを武器に

学年学科を越えた絆と笑顔 初心者歓迎 バレーボールサークル

毎週水曜と土曜に大学の体育館で活動しています。練習よりも試合形式が中心で、経験を問わず誰でも気軽に参加できる明るい雰囲気が魅力です。他大学主催の大会や学内球技大会への出場に加え、新入生歓迎会やクリスマスなど季節のイベントも充実。他学科の仲間とすぐに仲良くなれる環境で、バレーボールを楽しみながら交流を深めています。



エンジョイ!バレー